

The Dead are Blind
1937
by Max Afford

目次

闇と静謐

5

訳者あとがき 321
解説 大山誠一郎 326

主要登場人物

アガサ・ポイコット・スミス	篤志家
アンドリュウ・ニューランド	ポイコット・スミスの甥。ニッカーソンの友人
ジョージ・ニッカーソン	BBCラジオ局プログラムディレクター
テッド・マーティン	音響効果主任
カール・フォン・ベスケ	プロデューサー
オルガ・ルシンスカ	ペテランの花形女優
メアリ・マールウ	新進女優。アンドリュウの恋人
マーサ・ロックウエル	ペテランの脇役女優
キャスリーン・ノウルズ	脚本家
ゴードン・フィニス	俳優
ステイーニー・ロツダ	麻薬ディーラー
マイルス（マック）・アロイシウス・コンロイ	スコットランドヤード主任監察医
デニス・コノリー	スコットランドヤード所属の刑事
ウイリアム・ジェイミソン・リード	スコットランドヤード主席警部
ジェフリー・ブラックバーン	数学者

第一卷 視覚を伴わない音の世界

「ラジオドラマの天才は皆、放送が始まる前から、自らの信念の証を無意識のうちに示すものだ。自分が世に送り出そうとする放送が見知らぬ場所へと伝わり、二度と会うこともない、彼の目には見えない無数の人々の心に直接届くのだ」という信念を、自らの心の内で主張するのだ」

『ラジオドラマ論』ランス・シーベキング

第一章 定時のニュース

「これが毒ならば、どの修道士が私を殺そうと企んだのでしょう？」

『ロミオとジュリエット』 第四幕第三場、ジュリエットの部屋

これはジェフリー・ブラックバーンにとって忘れがたい事件である。

ジェフリーが今後、どのような事件に遭遇する運命にあらうとも、かの「暗闇と静謐の驚くべき事件」は、その記憶に今もなお鮮やかに刻まれているのは、彼をよく知る立場である私が何よりわかっている。巧妙で冷酷な野望が招いた凶悪な犯罪をジェフリーが解決に導いてから長い月日が流れたが、彼の活躍は末永く仔細に渡って語り継がれ、人々の間で殺人が話題に上ると、今もなお、どこであろうと、犯罪学上の偉業として言及されるエピソードである。

「犯人はぬかりなく先手を打った——ただひとつの例外を除いて」ジェフリーはこの事件について、こんな感想を述べている。「犯人はあらゆる法則を踏まえて慎重に考え、比較検討し、解釈を試みたというのに、あろうことか、可能性の法則を検討しなかったのだ」きざ気障な表現ではあるが、事実であ

ることに変わりはない。ジェフリーが居合わせた放送局のスタジオで遭遇した不可思議な事件は、いくつもの出来事が招いた、偶然の産物だった。主席警部がB B Cから招待されなかったら……？ ジェフリーが主席警部とコンビを組んでいなかったら……？ マイルス・コンロイが過去の事件との関連性を見いださなかったら……？ だが、今回の驚嘆すべき事件で投入された仮説や仮定をもとに、新たな小説が書けるかもしれないなら、是非とも書いていただきたい。

シエルドン判事殺人事件（論創社・刊「百」）、身の毛もよだつ「死を呼ぶ人形」の事件（国書刊行会・刊「魔法人形」）の幕が開く前の不吉な出来事にジェフリーが巻き込まれたときの唐突さを思えば、今回言及する事件で起こった一連の出来事に、彼がいつになく傍観者として関わっているのには、運命のいたずらのようなものを感じさせる。来客のひとりとして気乗りせぬまま現場に居合わせたジェフリーは、ほんの冷やかしのつもりで足を止めた結果、罪なき人々はもちろん、犯人をも巻き込んだ犯罪の罠に絡め取られることとなる。

この年、ロンドンには例年より早く春が訪れた。だが、この街がそれに知らん顔を決めこむわけがない。雪解けの三月から新緑萌芽ゆる六月の半ば過ぎまで、あらゆる階級（クラス）に向けて行われる催しが目白押しなのだ。英国自動車倶楽部はイーストボーンで国際ラリーレースを開催し、『デイリーメール』紙が主催する〈理想の家庭博〉は、（オリンピア）聖地に憧れる多数の植民地人を魅了している。英国産業博覧会では、祖国に帰ってマンチェスター通りで肩を組み、喜びを分かち合いたいという人々を動員した。シエイクスピア演劇フェスティバルのシーズンが始まると、ロイヤル・アカデミーとロシア芸術展覧会に芸術家が足を運び、競馬ならダービーやグランドナショナル、サッカーならウエンプリーカップの決勝戦へと、スポーツ観戦好きが大挙して集まる。このように心奪われる催事が山ほどあろうとも、

生来の詮索好きであるスコットランドヤード犯罪捜査課のウイリアム・ジェイミソン・リード主席警部が、放送界の大きな催しに並々ならぬ関心を向けるのは必然だった。

それなのにジェフリー・ブラックバーンは、捜査に意欲を燃やす相棒の熱意には与しなかった。彼にとってラジオとは余暇を過ごす手段としては実に不適切であり、放送する番組の品格を誹るのほもちろん、ラジオという媒体の趣向は奥行きに欠けるといえるのが一番の反対要因だった。ラジオとは、数分間は好奇心に駆り立てられて観察に励むかもしれないが、不条理以外の何者でもなく、一面的な肖像画を描くシュールリアリストのようなものだとも語っている。このたとえは適切ではないかもしれないが、感動を重んじ、すべてを動きや色でとらえるジェフリーは、ラジオを聴いていると、複製による「機械的な貧血症状」のため、非常に落ち着かなくなってしまうのだ。演劇における顕在的な感情の吐露、新聞の見出しが持つ感動が凝縮したメロドラマ性に取って代わるのがラジオであるとの見解を、彼はあからさまに笑い飛ばした。それでも主席警部と同居するヴィクトリアの賄い付きアパートで、高価な大型無線機器がラジオ放送を受信していることも、また事実である。だがジェフリーは、磨き上げたラジオ受信機を手に入れたのは、良友リード主席警部の熱意を気持ちよく受け入れたことの現れに過ぎないと、ことあるごとに自分から述べるのだった。

「主席警部の弱点といったら、形の美しいパイプ、最高品質のウイスキー、天空からの声ぐらいだ」友人たちをアパートに通すと、スリッパ履きの主席警部がマントルピースの前を歩き、ラジオが大音量で鳴り響いていたところに遭遇すると、ジェフリーは自虐気味にこう言っていた。「ただの薄っぺらな愛着だと思ったこともあった——コカインに目がないシャーロック・ホームズのようにね」

対するリードは気の強そうな眉をクイツと上げて客人を一瞥すると、受信機に歩み寄り、エボナイ

ト製のノブを回して、大音量が部屋の隅々まで響きわたるようボリュームを上げるのが常だ。

ラジオはジェフリーにとつては「天空から聞こえるおぞましき声」を発するものだが、主席警部には何より魅惑的な存在だった。娯楽の精神に没入し、朗読の間は部屋の灯りを消し、目を閉じるものだと言つて憚らなかつた。リードの主張に納得できないジェフリーは、きまり悪そうに部屋の中を歩き回つては、暗闇の中、家具の突起物に思わぬ形でぶつかつて痣を作るか、そうでなければ椅子に体を投げ出し、苦々しい顔でドラマを最後まで黙つて聴いている。そのくせ、たまに洒落心をくすぐられると、リードから「役者にも演技で表現する機会をあげたまえ！」と、苛立たしげに言われても気にも留めず、深刻な劇のせりふを滑稽な茶番劇に置き換えて茶々を入れるのだった。ラジオは社会不安を招く道具となりかねないとされる時勢ではあつたが、ジェフリーは、「甲の薬は乙の毒」という諺には一理あるとの認識をかねてから持つ人物である。かくして彼も歩み寄りの姿勢を見せ、ラジオドラマが始まれば別の部屋に逃げ込み、ドアを固く閉めれば済むと言う程度にまで寛容になつた。

かの月曜の夜、彼らの部屋では夕食が早めに供された。ガスストーブの煙にむせながら、ふたりは座つてコーヒーとタバコをたしなんでいた。いつしか話題はラジオ劇全般へと移つていく。ルクセンブルクのラジオ局が〈ウェイデイスの万能キッチンクロス〉の提供で「夕餉のミステリー」と題する番組を制作し、主席警部が聞き及んだ限りでは、謎と騒動が相まったこのドラマを聴かずして、夕食は終わらないほどの人気番組だという。ラジオに対して強い偏見を持つジェフリーは、この手の話題には嫌々耳を貸していたのだが、この日、夕食を終えたふたりは、先般聴いたラジオ劇について語り合つていた。

「実によくできたドラマだったな」リードはコーヒーカップを押しどけ、パイプに手を伸ばしながら

言った。会話の背景で、やつと聞き取れるぐらいにまで音量を絞ったラジオの音が弱々しく単調に響いている。

「随分とお粗末な演出じゃないですか」ジェフリーが反論する。「キッチンクロスに微量の毒物とは！ おお、時代よ！ おお、風習よ！」（マルクス・トゥッリウス・キケロが「カティリ」
「ナ弾劾演説」で世の腐敗を嘆いて発した言葉）

パイプを軽くくわえたリードが太い眉を寄せた。「問題は、君があまりに高尚すぎるところにあるのではないかね、ジェフリー？」

「そのようですね」ジェフリーは和やかに相槌を打った。「無味無臭で殺傷能力が高く、被害者の体から検出は不可能という、現代科学では解明できないインドの謎の毒物がトリックだなんて、教養のない連中とそしりを受けてもしようがないでしょう。あえて苦言を呈するならば、警部、こんなくだらないドラマを世間に押しつける輩（やから）を取り締まる法律が必要ですよ」

主席警部は肩をすくめ、「必要だとも——君がこれからも粗探しを続けるならな……」と言うと、咎めるようにパイプの柄をジェフリーに向けた。「それはともかく——そんな毒はないと、なぜわかるのかね？」

「まさか」ジェフリーも非難めいた口調で言い返した。「スコットランドヤードの主席警部の口から、そんなせりふを聞くことになろうとは！」

「聞き捨てならないな」リードが声を荒らげる。

ジェフリーは座っていた椅子をぐいと引きずって前に出た。「何をおっしゃる！ 主席警部、どうやれば地球が丸いと立証できますか。もしそんな毒物が実在するなら、なぜエドワード・プリチャー医師がアンチモンの代わりに使わなかったのでしょうか？ なぜトーマス・ワインライトが発見しな

かつたのでしよう。悪名高き過去の毒殺者をご覧なさい！ ウイリアム・パーマーはストリキニーネを使い、ヘンリー・セツドンは砒素を使っていたとの嫌疑を受け、ハーレイ・クリッペンは、妻に臭化水素酸ヒオスシンを盛って警察を欺こうとした。だがどの事案でも、毒物は検視によって検出されているんですよ！ 絶対に見つかからない毒があるなら、過去の毒殺魔が必ず使うはずだ。特に、逮捕されるまで毒殺で生計を立てていた、ニール・クリムとジョージ・ヘンリー・ラムソン博士のような犯罪者はね！

（ジェフリーが言及した人物はすべて、十九世紀末から二十世紀初頭に掛けて世間を騒がせた毒殺事件の犯人として知られている）

「君が例に挙げるのは二十年前の犯罪ばかりだ」リードが異を唱えた。「現代の化学はどう進歩したのかね？」

ジェフリーはタバコの灰をはじき落とした。「化学者が毎月新しい毒物を発見しているというのは、おっしゃるとおりです。しかしその事実を引き合いに出すと、あなたの仮説が説得力を失うだけです。よ、警部。毒物は一度発見され、表にまとめられたら最後、もう検出できないとは言えないのですから！」そう言って、彼は椅子に深く座り直した。「毒殺と言えば——そう、斬新な手段が一向に明るみにならないのはご存じですよ。たとえば一九二二年のトンブソン・バイウオーターズ事件。トンブソン夫人はガラス粉で夫を毒殺しようとしたが、これは一五四〇年頃、ルクレツィア・ボルジアが使った手口です」

「前にコンロイが言っていた、現代の化学物質はどうなのかね——ガソリンの主成分、テトラエチル鉛は？」

「お願いです、警部、これでは議論になりません！ それこそ消毒剤から除草剤まで、事実上、誰もがあらゆる手を使って人を毒殺できるのですから。過去には存在しなかったガソリンを飲ませるとい

つても、ソクラテスの毒ニンジンニンジを今風に焼き直したに過ぎません。それにもうひとつ、テトラエチル鉛は既知の毒物であり——

リードは罨にかかったテリアよろしく、噛みつくような口調で言い返した。「もちろんわかっているとも！ ただし世間には、同じ威力を持つ毒物がまだ見つかっていないかもしれないじゃないか！」

ジェフリーはあくびをした。「大人のおとぎ話があなたの心を癒やす糧になるかは別として、そんな毒の話聞いたことがありますか？」

「よくぞ言ってくれた！」主席警部はとどろくような声で言った。「もちろん聞いたこともない。発見されなければ未知の存在に決まっているがね」冷静になると、リードは居心地が悪そうに幅広の肩を丸めた。「君の言うことも一理ある。もしそんな毒があれば、悪人の手に入ると恐ろしい凶器になりかねない」

ジェフリーはにやりと笑った。「ラジオドラマではありませんよ、主席警部。『真実はすべてを征服す』とは、ラジオ脚本家がタイプライターに向かえば、当たり前のように頭に浮かぶモットーです。真実は常に明らかになる。たとえどれほど不可解な状況にあつても。だから真実とは、こんなにも理不尽なのです」

リードは愛想のない含み笑いをした。そして、パイプの中にあるタバコをマッチの軸でほぐした。「根本的な問題を推測で批判するのは、やめたほうがいいぞ」ジェフリーがにらみつけたが、リードは話を続けた。「BBCのプログラムディレクターをしている、ニッカーソンという若者を覚えているかね？ 数か月前、犯罪学がテーマのトーク番組シリーズへの出演を君に持ちかけた男だよ——」

「その話は断りました」話を遮ってジェフリーが答えた。「ええ、ジョージ・ニッカーソンのことは覚えています。彼がどうしました?」

「ポートランド・プレイス付近に建設された、BBC新局のマネジャーに任命されたのだ——確か、ウィグモア・ストリート沿いだ。今夜が正式な開局日なんだ」リードはここで一旦息をついてガストープの栓をいじり、「彼が招待状を二通送ってきた」と、もったいぶった口調で話を締め括った。

「へえ……!」ジェフリーは茶目つ気を見せながら、顔をくしゃくしゃにして笑った。「だから今夜は夕食を早めに取ったというわけですね! アリスよろしく、不思議な鏡の国へと繰り出そうとお考えですか?」

リードは居住まいを正した。追い詰められたイカが墨を吐くように、雲のようなタバコの煙の中に隠れて姿が見えない。「もちろん、私は行くぞ」彼はきっぱりと言った。「午後十時半から上演する『暗闇にご用心』というラジオドラマを是非とも見学したいのだよ」ジェフリーが興味深げに黙って話を聞いていると、リードは文字どおり渦を巻くタバコの煙から顔を突き出し、耳障りな声で言った。「異論はあるかね?」

ジェフリーはタバコをもみ消して言った。「異論どころか」彼は穏やかな声で返す。「僕から文句なしの同意を得て、仕事にかこつけた休日が過ぎるのでから」

「ひよっとすると」リードの言葉の端々に皮肉が込められている。「君は、私に同行するのが沽券こけんに関わる一大事だと思っではないかね」

ジェフリーは頭の後ろで手を組み、天井を見上げた。「欠点を指摘するときには、本題とは関係ない相手のお気に入りの話題に触れるのが定石じゃないですか」ジェフリーはつぶやいた。「アレクサ

ンドロスは実に慧眼の持ち主で——」リードの椅子が床をきしませる音がしたので、ジェフリーは話を途中でやめた。主席警部が立ち上がった。

「君のくだらん格言を黙って聴いているほど暇ではないんだ」リードは齒をむき出して反論した。ジェフリーは身を乗り出してリードをそっと席に押し戻すと、咎めるように首を左右に振った。「鋼の自制心はどこに行っただんです、警部？ いつもは絶対に感情を表に出さないというのに。あなたの自制心を妨げているのは、最近、事件が起こらないからだと言っただけでいいでしょう——」

「何だと——！」

「本音を言いますとね」ジェフリーは静かな声で言った。「僕はあなたと一緒にいきたいんです。時間と才能をとことん犯罪学に費やしてしまつたので、二項定理に関する画期的な論文を書くかうという意欲がまったくなくなつてしまいました」と言つて、彼はため息をついた。「極悪非道な凶悪犯罪者らが夕食時のラジオミステリーに注目しだしたさうですし、僕は毎晩、かなり退屈しているんです。だから警部、今夜はお伴しましょう」

リードが返事をする間もなく、突然部屋の電話が鳴り響いた。彼は低い椅子から立ち上がると、電話機へと歩いていった。主席警部が受話器に向かつてぶつきらばうに「もしもし」と話しかけるのを聞いているジェフリーの耳が、奇妙な喉声をとらえた。相手の話を聞く主席警部の顔から苛立ちが消えていく。大きくうなずいてから彼は言った。「それは大変ご親切に」驚くほど愛想のいい声だった。

「はい——お待ちしております」彼は受話器を置いて振り返つた。

「警視総監からでしたか？」ジェフリーが明るい声で尋ねた。

リードは唇を固く結び、ジェフリーの問いかけには応じなかつた。「ニッカーソンだ」彼は感情

を押し殺した声で言った。「スタジオに向かう途中で電話をしてきた——私たちがドラマの見学に来るのかと訊いてきた。もうすぐここに着くそうだ。だが、いいか」主席警部の声が重々しくなった。「オックスフォードやケンブリッジでしている講義のような話で彼を当惑させたら、首をへし折るぞ！」

そのとき来客の到着を告げるドアベルが鳴った。ジェフリーは椅子から立って出迎えに行つた。

ジョージ・ニッカーソンは、まさにラジオの申し子のような男だつた。機関銃のように短く吠えるようにしゃべり、エネルギーが有り余っているのか、数分もじつとしていられなさそうだ。ただジェフリーは、あまり好意的には見えないリードの態度のほうが気になつてた。主席警部は三脚目の椅子を暖炉のそばまで持つていくと、ウイスキーの飾り台デコレーションに向かつてままだつた。むしろ愛想がよくて困るほど欲待するリードがこんな態度を取るのはなぜなのだろうか。初対面の客に挨拶すると、ジェフリーは話を聞こうと椅子に深く腰かけた。だが、来客の第一声はジェフリーに向けられたものだった。ニッカーソンは椅子から身を乗り出して話した。

「ご依頼の件ですが、ミスター・ブラックバーン——考え直してはいただけませんでしょうか。せっかくの機会ではないですか。いい宣伝になります。考えてもみてください——あなたの声は何千、何万もの聴取者の耳に届くのですよ」

「そんなこと考えたこともありませんでした、ありがとうございます」ジェフリーは素っ気なく礼を言うと、にっこり笑つた。「またとないお申し出ですが、正直に申し上げますと、かの『魔法人形』事件を解決した時点で、僕の探偵としての名声はすでに確立しているのです」

ニッカーソンは肩をすくめて「ならば、しょうがありませんね」と言うと、振り返つてリードから

グラスを受け取った。「どうやら興味を持っていただけなかったようですな、主席警部」

リードは残念そうな顔で言った。「お引き受けできかねます。公務に就いております関係上、立ち会いは許可されないのです」彼はつぶやくように答えた。「それに、この若者が行きたくないというのに無理強いするわけにはいきません、たとえ彼がくだらない偏見の持ち主であろうとも」

ジェフリーは主席警部の言葉が気に障ったようだった。「主席警部、今夜の開局式典の同行に関しては主義を曲げてもいいですよ。僕の言い分を尊重してくださいさるなら——」

「シート！」リードは強い調子でジェフリーを黙らせた。彼は片耳をそばだたせ、両目は腕時計をじつとにらみつけている。そしておもむろに振り返り、「ニュースの時間だ」と言うと、顔を上げてラジオのほうを見た。「もう半分も聴き逃したじゃないか。定時のニュースは欠かさず聴いているというのに」彼はニッカーソンにそう説明すると、部屋を横切ってラジオのダイヤルを回した。

現在発売中のタブロイド紙の記事内容を詳しく解説する、快活だが抑揚のない声が部屋中に流れた。三人は黙ってニュース番組に聞き入った。音声が中断し、カサカサという紙の音がする。少し経って、几帳面で歯切れのいい声がふたたび聞こえてきた。

ハートフォードシャーのロイストン・タワーズにある自宅で重篤な病の床にある著名な篤志家、ミス・アガサ・ボイコットⅡスミスは病状に関する、最新の情報を手いしました。わずかではあります、容体は好転したとのことです。ミス・ボイコットⅡスミスは面会謝絶の状態が続き、唯一の身内である甥が屋敷に呼ばれ……